

高校生の道徳的判断の発達を目指した道徳授業

An Attempts of Moral Lesson to Develop High School student's Moral Judgment

阿部 知行, 池田 誠喜

ABE Tomoyuki and IKEDA Seiki

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第33号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.33, Feb., 2019

高校生の道徳的判断の発達を目指した道徳授業

An Attempts of Moral Lesson to Develop High School student's Moral Judgment

阿部 知行, 池田 誠喜

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学大学院
ABE Tomoyuki and IKEDA Seiki
Naruto University of Education, Graduate School
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本稿は、コールバーグの道徳性発達理論を基に、高等学校でモラルジレンマ（道徳的葛藤）授業を行い、生徒が内面の自分と向き合い、他者の考えや価値観を知ることによって道徳的判断力を高めることを目指した授業実践報告である。高校3年生36名のクラスを対象として、道徳的価値項目「公德心と生命の尊さ」を取り上げた。ホームルーム活動の時間を活用し、第1次授業では映画「ジョンQ」を視聴し、第2次授業でモラルディスカッション（集団討議）を取り入れ授業を実施した。生徒の記述データ、授業の様子を検討した結果、授業構成上の工夫と展開における一定の成果と課題が明らかになった。

キーワード：高校生の道徳教育 コールバーグ理論 道徳性の発達段階 道徳的判断力 ジョンQ

Abstract：This paper is a practical research report aiming at the development of moral judgment by conducting amoral dilemma lesson composed of Kohlberg's moral developmental theory to high school students and noticing other students' moral values through discussion. Participants in this lessons were 36 high school students, The subject of the class is the moral value item "The moral heart and the preciousness of life". These lessons was conducted in 2hours of lesson composition in 3 hour units at the time of home room activity. In the first lesson, the students watched the movie "John Q." In the second lesson, a moral discussion was carried out. The results of the class and the student's description data revealed certain results in the development of the moral judgment of the participating students.

Keywords：Moral education for high school students Kohlberg theory Developmental stage of morality Moral judgment

I. はじめに

1. 道徳教育で育成する資質や能力

高等学校学習指導要領（文部科学省，2009）は、道徳教育を「豊かな心を持ち、人間としての在り方生き方の自覚を促し、道徳性を育成することをねらいとする教育活動であり、社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割を持っている」と示している。平成28年の中央教育審議会答申の課題を踏まえた道徳教育の在り方での、「答えが一つではない課題に誠実に向き合い、それらを自分のこととして捉え、他者と協働しながら自分の答えを見出してゆく思考力・判断力・表現力」や「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」を育成することの重要性に言及した提言を受け改定された小中学校の道徳の教科化の動向や今日の家庭や地域社会及び学校における道徳教育の現

状及び生徒の実態を踏まえると、高等学校においても道徳教育の充実を更に図ることが強く要請されているものと捉えることができる。

道徳性とは、人間としての本来的な在り方やより良い生き方を目指してなされる道徳行為を可能にする人格的特性であり、統合されたものであるといえる。学校における道徳教育においては、各教育活動の特質に応じて、特に道徳性を構成する諸様相である道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度などを養うことが求められている（文部科学省，2009）。

2. 高等学校の道徳教育の現状

高等学校の道徳教育は、自分の人生をどのように生きれば良いか、生きることの意味は何かについて思い悩む時期であり、自分自身や自己と他者との関係、広く国家や社会について関心を持つ時期で、生徒が人間としての

在り方生き方を主体的に探求し、豊かな自己形成ができるようになるための、人間としての生き方に関する教育であることが述べられている（文部科学省，2009）。

実際には、指導方針や重点目標を定めた上で全体計画を作成し、公民科やホームルーム活動を中心に各教科・科目を通じて年間指導計画に即して道徳教育が実践されている。しかしながら、実際は、小・中学校のように道徳の授業が設定されていないことなど、実践研究や研修の機会が少なく道徳教育が充実しているとはいえない状況である。

高等学校の道徳教育がこのような状況にあるなかで、茨城県では、平成19年より、全ての県立高等学校の1年生において総合的な学習の時間の中で「道徳」の時間を年間35時間履修させている（小川，2014）。また、東京都でも平成19年度から実施している「奉仕」の時間を発展的に統合し、新教科「人間と社会」として平成28年度から必修科目として道徳教育に取り組んでいる。年間35単位時間を確保し、演習や体験活動を通して、道徳性を養い判断基準を高め、より良い生き方を主体的に選択して行動できる力の育成を図っている。道徳教育を高等学校で推進することは、主体的に判断し行動する力を身につけることにつながることを期待される。

3. Kohlberg の認知発達理論とモラルジレンマ授業

荒木（1997）によると、Kohlberg（1969）の道徳性の発達とは、道徳的な判断や推論、つまり道徳的な認識〔公正（fairness）や正義（justice）の見方、考え方〕が変化することである。同じ行為であっても、その理由を道徳性の発達という観点から分析すると、道徳性の発達という視点から見るとまったく異なることが示されている。Kohlberg（1969）は、「道徳性」を「公正に関する普遍的原理」「役割取得の原理」「人間尊重の原理」への志向と捉え、この道徳性の在りようを道徳的判断から説明している。そしてこの理論の哲学的基礎を Dewey（1903）理論に、心理学的基礎を Piaget（1930）理論においている（Kohlberg 1969, 佐野・吉田 1993）。

Kohlberg（1969）は、ピアジェの認知発達説に基づき、認知的発達理論を展開し、次のような基本的な仮説を立てている。

- ① 発達とは、基本的な認知構造の交換を含む。
- ② 認知構造の発達は、個体の構造と環境の構造との相互作用の結果である。
- ③ 認知構造は、常に行為の構造（シエマ）である。
認知構造の発達は、個体と環境の相互作用を通して道徳規範の分化と統合が起こり、より高次の均衡化に向かうことによって達せられる。
- ⑤ 文化や社会的環境の影響を受けることが少なく、発達には普遍性がみられる。

荒木（1997）伊藤ら（2016）によると、Kohlberg の

仮説は、認知的な発達とは子どものなかに生じる均衡化への営みであり、認知構造が次の段階に変換するためには、今の概念（シエマ）と環境の対象との間に不均衡状態が生じることが必要であると述べている。そこで、道徳的認知を不均衡にするためにモラルジレンマ（道徳的価値葛藤）状況を作り出すことで、不調和や矛盾を感じ、その状況を調整するために自分の考えを変えたり、調整したりする動機が生まれるという。子どもの道徳的な思考を刺激して発達を促すためには、別の視点から考えさせたり、多くの他の子どもや大人の判断の論拠や意見、見方に触れさせたりすることが大切である。特に自分よりも上位の段階の道徳的思考に出会うと、均衡化のために、自分の概念を調節するよう動機付けられ、結果として道徳性の発達段階が押し上げられると説明している。Kohlberg（1971）は、この道徳性の発達段階を3水準6段階（表1）に分け、「道徳教育の目標は一人一人の子どもの道徳判断と道徳能力の発達を促進し、子どもが自分自身の道徳判断を用いて自分の行動をコントロールできるようにすることである」と主張している（荒木，1997）。

本稿では、この Kohlberg 理論を基にして作られた道徳教育のための授業スタイルを取り上げて、高校生に実施することとした。相澤（2010）によると、本稿で取り上げるモラルジレンマ授業は、価値の教え込みに陥りがちな道徳授業に対して、子ども自身の価値観や自己決定を最大限に尊重する点、個性や差異を認める点、発達段階の評価基準に基づいて道徳性の発達を支援できるという点で優れており、実践する高校生の道徳性の育成に寄与するものと期待できる。

4. 兵庫教育大学方式に道徳の授業

日本においてコールバーグ理論に基づく授業の組織的な研究が兵庫教育大学の道徳性発達研究会を中心に行わ

表1 Kohlberg 道徳性発達段階（出典：荒木，1987）

水 準	段 階
I 前慣習的水準 (道徳判断は自己中心的活動の反映である)	0：自己欲求志向—自己の願いが叶うならば、それは善い行いである。 1：罰回避と従順志向—道徳的基準は外的、他律的で、自己の行為の外的な結果が人からほめられるか、罰せられるかで決められる。 2：道具的互惠主義志向—自己の欲求や利益を充足するのに役立つ限りにおいて道徳的とする。
II 慣習的水準 (社会的賞賛と非難に関する期待によって統制された役割への同調としての道徳判断)	3：よい子志向—他人からほめられたり、他人とよい関係をもとうとしたりする方向で道徳判断がなされる。 4：法と社会秩序志向—義務をはたし、権威を尊重し、社会的秩序を維持するために伝統的な権威による罰を避けるように同調する中で道徳判断がなされる。
III 慣習以後の自律的、原則的水準 (慣習にとらわれた判断をこえて自律的に判断する)	5：社会的契約と法的志向—正しい行為は個人的権利を考慮しながら、かつ社会全体から承認されるような形で判断される。 6：良心または原理への志向—社会的統制に合致するだけでなく、論理的普遍性を一貫性に照らして自己選択した原則に合うかを判断していく中で良心が働く。

れてきた。そこで構築された授業モデルは、Galbrith & Jonse (1975) や Beyer (1976) らの授業過程（1時間モデル）を参考にして、1982年に荒木らにより開発されたもので、兵庫教育大学方式として知られている。荒木（1991, 1995）は、モラルジレンマ授業において押さえるべき要素、条件、留意点を次の7点示している。

- ① 道徳教育のねらいは、子どもの道徳性をより高い水準に発達させること
- ② そのため、授業では子供に解決を迫るモラルジレンマ資料を用意する
- ③ ジレンマに対して自分の意見を表明する
- ④ 教師を交えた話し合いのなかで、自分の考えを他人の考えと絡ませて吟味し、練り上げる。話し合いを有効な思考過程にするため
 - ・ 役割取得の機会—他者の立場に立って考える
 - ・ 道徳性の発達から見て一段階上位の考え方に触れる—道徳的な認知的葛藤を経験する
 - ・ 行動が引き起こす結果が他者に及ぼす影響を推論する
- ⑤ 最終の判断とその理由をまとめる
- ⑥ 教師の役目は子供の学習を助ける水先案内人、補助、介添える
- ⑦ 学級の雰囲気や公正や正義を重んじ、思いやりを大切にしている道徳的な環境とする学級経営に心がける

II. 研究の目的

本実践研究の目的は、高等学校のホームルーム活動を活用して、道徳の授業を行い、高校生の道徳性を高めることである。他者の考えや価値観を知ることによって道徳的判断力を高める学習活動を構成する。そのための工夫として、①モラルジレンマ資料の選択、②協同的なコミュニケーション、③2つの支援方法を用いた授業を実践し、成果と課題を検討することとした。

III. 方法

1. 対象

対象 公立高等学校 3年生 (36名)
 時期 平成X年Y月

2. 方法

本実践では、中学校道徳科における内容項目「公德心」と「生命の尊さ」を取り上げ、3時間の授業を設定し、第1次では2時間を使い資料の映画「ジョンQ」を視聴した。第2次では、資料の内容について自分自身で深く考え、ディスカッションを通して他者の考え方や感じ方に触れ、再度、道徳的判断を行う授業を実施（表2）。

表2 学習計画

授業回数	授業内容
第1次授業①	モラルジレンマとは何か？モラルジレンマ資料 映画『ジョンQ』の視聴
	道徳性を高めるとは？
第1次授業②	モラルジレンマ資料 映画『ジョンQ』の視聴
	モラルディスカッションのためのグループでの係決め
第2次授業	第1次判断、モラルディスカッション、第2次判断

3. 検証の方法

生徒が記述した第1、2次判断の結果を賛否の数字によって考察するとともに、ワークシートに記述された生徒の考えをコールバグの道徳性発達段階の3水準6段階に当てはめ、授業を通して、道徳的判断がどのように変化したか検証する。検証に当たっては、大学教員2名と大学院生2名によって、コールバグの道徳性発達段階（表1）をもとに、どの発達段階に当てはまるかについて検討し決定した。

IV. 学習支援の工夫

1. 授業構成上の工夫

1) モラルジレンマ資料の選択

授業で取り扱う資料は、各出版社から発行されている道徳に関する書籍から、新聞記事、小説、詩歌など多様ななかから選択することができる（西村2013）。今回モラルジレンマ資料として映画「ジョンQ」を選択した理由は2つある。第一として、この作品が道徳的価値項目である「公德心」「生命の尊重」がどちらも大切なもので、この内容項目のどれを重視するかは簡単に判断できない物語りの資料で、高校生にモラルジレンマ状況を容易に作り出せることがあげられる。答えのない問題についてディスカッションすることにより、自分自身の考えが保証される状況により、活発な意見交換や議論が展開されることにつながると考えた。第二は、映画資料なので、映像や音楽、登場人物の喜怒哀楽の感情を五感を通して感じることができ、深く自己関与される資料となっている。このことにより、モラルジレンマ授業における役割取得の機会を作り出すことが期待できる。

2) 第1次・第2次判断におけるディスカッションの意義

授業実践は、図1の学習指導案の通り、第1次判断・理由づけ→ディスカッション→第2次判断・理由づけの順に実施する。自己の判断を決定する際、第1次判断では自己の価値観など内的な価値判断を中心として判断し、ディスカッションで他者の意見や多様な道徳的価値に触れることで違った側面から第2次判断を行い、理由づけすることで、道徳性をより高めることにつなげることが

できると考える。

2. 授業展開上の工夫

1) ディスカッションの活性化

ディスカッションが活発に行われるための展開上の工夫を3点示す。第一に、生徒自身が自分の意見を持ち、その理由について根拠を示し他の生徒に説明できるように準備させることである。その為に、ワークシートに記述する目的を理解させるとともに、自分自身の考えをワークシートに記入する時間を十分にとる。第二として、少人数のグループをつくり、あらかじめ司会進行、記録、発表の役割をグループ内で決めておくことで、効率的にディスカッションを実施できると考えた。第三として、この正解があるわけではない問いであることを重視し、たとえ少数意見であったとしても安心して発表するよう教師が全体に伝える。

さらに、オープンエンドの終末とし、同様の効果となるよう構成した。

2) バランスに配慮した発問

発問は、生徒の実態やディスカッションでの意見の偏りに注意し、ディスカッションや第2次判断で少数意見のため議論に取り上げられづらい状況が生じた際に、少数意見を尊重するように生徒を意識づける。また、偏った結論に流れていくようであれば、反対の考えの正当性を問う発問を提示し、多角的・多面的で活発なディスカッションとなるようにする。

ホームルーム活動（道徳） 学習指導案

1 日 時

2 ホームルーム

3 主 題 名 「君はルールと命のどちらを選択するのか」
道徳的価値項目（公德心と命の尊さ、社会正義・家族愛）

4 主題設定の理由

学校や家庭、地域社会のなかで生活していくうえで、個人は集団や他者とかわり生活している。こうしたなかで、よりよく生きていくためには道徳性を高めることが求められる。5月に「道徳に関する意識調査」を実施した結果、303HRの生徒は思いやりや友人に対する配慮などの項目の数値が比較的高く、他者や集団に対する意識が高い傾向があることが分かった。

学校生活をはじめ、今後社会のなかで生きていく生徒たちは、時と場合、場所に応じて複数の道徳的価値のなかから、どの価値を優先するのか判断を迫られることがあり、主体的な判断に基づき道徳実践を行い、自立した人間として他者よりよく生きるために道徳的判断が必要である。以上のことから本主題を設定した。

5. ね ら い

モラルジレンマ（道徳的葛藤）についてディスカッション（道徳的討議）を通して解決していく過程を体験し、道徳的判断力を養う。

6 指 導 計 画

(1) これまでの学習
モラルジレンマの資料となる映画「ジョンQ」を視聴する。……………2時間

(2) 本時の学習

前時に視聴した映画「ジョンQ」のモラルジレンマについて道徳的判断と理由づけを行い、モラルディスカッションを実施し、他者の意見や考えを踏まえ再度道徳的判断と理由づけを行う。
……………1時間

7 資料について
別紙参照

V. 教育実践の実際

1. 授業の実際

1) 主題名 「君はルールと命のどちらを選択するのか」

第1次授業 教材資料「ジョンQ」の鑑賞

第2次授業 「君はルールと命のどちらを選択するのか」

2) 学習指導計画

学習指導案を図1に示す。

【第1次授業】

モラルジレンマ資料の映画「ジョンQ」の視聴

第1次授業では、モラルジレンマ資料の映画「ジョンQ」を視聴した。事前に、内容（あらすじ）・登場人物について説明し、授業の内容と関係する公德心と命の尊さの道徳的価値項目2つを示し、着目するポイントを押えて視聴するよう指示した。また、教材資料の視聴後、6～7名の6班を編成し、司会進行、記録、発表の係決めを行い次回の授業で実施するディスカッションの準備を行った。

教材資料に対して多くの生徒が興味を示し、真剣に視聴することができていた、なかには純粋に親が子を想う気持ちに心を揺さぶられ、感情移入して涙を流している生徒が数名見受けられた。また、自発的に意見交換が行われるなど、生徒たちにとって興味を引く資料となった。

8 展開

段 階	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価
導 入 (5分)	○本時の内容を知る。 ○前時の映画「ジョンQ」の内容を振り返り、道徳的価値を明確化する。	○主人公の道徳的価値について確認させる。	
展 開 (42分)	○第一次判断 主人公の行動に対する賛成か反対かの判断を行い、その理由を付箋に記入し、黒板に貼付する。 ○6～7名の6グループを作り、論争点について各自の書き込みをもとに、ディスカッションを行う。 ○各グループのディスカッションで判断した結果を代表が発表する。	○道徳的価値を自分自身に照らし合わせ（自己を見つめる）、どう判断したかを考えさせる。 ○主人公の判断に対し、賛成・反対をもとにディスカッションさせる。また、相互に意見を出し合い、他者の意見を開き、物事を多面的・多角的に考えさせる。 ○グループの意見を集約し、賛成か反対かの判断をさせる。ただし、正解は一つとは限らないので、分からないという判断も尊重する。	○ディスカッションを通して道徳的判断をすることができた。
	○発問「もし自分の子どもが家族なら同じ判断をしようか?」	○状況によって判断が変わる可能性もあり、判断の基礎となる道徳的価値について考えさせる。 ○展開が属した流れにならないよう配慮し、発問も状況によって工夫する。	
	○第二次判断 本時の学習を踏まえ、再度判断しその理由を付箋に記入し、黒板に貼付する。	○モラルジレンマについて、善悪について迷いながら判断することで、人間としての生き方についての考えを深めさせる。	○自分の道徳的判断を主張することができた。
ま と め (3分)	話し合った後の自分自身の変化について考える。		

図1 学習指導案

教材資料の視聴後、第2次授業に向けて、授業の流れを確認した。公德心と生命の尊さの2つの道徳的価値を自分自身に照らし合わせて判断し、その内容をもとにグループごとにディスカッションを行うことを確認、グループ分けと役割分担を決めた。

映画「ジョンQ」のあらすじ

舞台はアメリカ・シカゴ。ある朝寝ていたジョンは表でがちゃがちゃと機械が動く音に気が付き、飛び出すとローンの不払いで妻デニズの車が差し押さえられ回収されようとしていた。ジョンは妻が仕事に行けなくなると訴えるが、差し押さえた人はそれならローンを払えと言い放ち、妻の車は無情にも回収された。ジョンは最近会社のリストラの対象となり、正社員からパートに格下げされ、給料が減り生活が苦しかった。朝食の席でも新聞の求人欄を見て新しい収入源を見つけようと必死になった。パートに格下げされたため仕事は半日で終わり、工場勤務のため不慣れなネクタイを締めて副業をしようと面接を受けるが落とされ続けた。苦しい生活でも救いは息子マイクの明るい笑顔を見られることだった。週末、少年野球に所属しているマイクの試合を見ていると、走っている最中にマイクは胸を押さえて倒れ、その場で昏睡状態に陥った。地元の救急病院に運び、別室で外科医のレイモンド・ターナーと病院長のレベッカが、マイクは重度の心臓病で、一刻も早い心臓移植手術が必要だと告げた。ジョンは移植者リストにマイクの名前を載せるように頼むが、手術費用は高額で、移植待ちのリストへ載せるだけでも高額の費用を払わなければならない。レベッカは「あなたが入っている保険は、移植手術には適用されない」と告げた。ジョンが働いている会社に問い合わせると、ジョンが正社員からパートに格下げされ、無断で会社の都合で保険のランクも下げられたため、移植手術には適用されないうえ、両親ともに職がある事から国からの補助も受けられない。ジョンとデニズは家具を売り払い、寄付を集め金策に走ったが、病院からは支払いが足りず退院勧告が出される。我慢の限界に達したジョンは、医師や患者を人質に救急病棟を占拠。マイクを移植待ちリストへ載せることを要求するのだった。

【第2次授業】

道徳的判断とモラルディスカッション

第2次授業では、視聴した映画のなかの登場人物の気持ちやモラルジレンマの状況に対し、自分自身の道徳的価値に照らし合わせ、賛成か反対かを問う第1次判断を行い、その根拠となる理由をワークシート(図2)に記入後、さらに付箋に理由を記入し黒板に添付して可視化した。次に、6つのグループに分かれディスカッション

を行い、自分の考えの根拠を示して相手に伝えるとともに、他者の意見を聞き物事を多面的・多角的に考え、さらに、グループの意見を発表し合い、他者の意見を参考に第2次判断を行い、その理由をワークシートに書き、最後に付箋に書いて黒板に添付した(図3)。

授業の初めに、モラルジレンマとなる道徳的価値項目について確認し、何について判断するのが明確にすることで、第1次判断を適切に行うことができた。ワークシートの記入については、根拠を示して理由を述べている生徒が多数であったが、無記入の生徒も見受けられた。

ディスカッションでは、各グループで司会進行係を中心に積極的な取り組みが行われ、予想以上に自発的に意

303HR 授業「モラルジレンマと道徳的判断」ワークシート

() 番 氏名 ()

1. 第1次判断

主人公の行動に対して、 賛成 ・ 反対 ? (どちらかに○をつけて)

理由は?

- ・ 気持ちやわかるが、やり方、方法は他にもあったと思う
- ・ 自分の意思で行動すべき? ちい自分勝手…?

↓

2. ディスカッション (メモ)

賛成 → あの状況では仕方ない
その方法しかなかった。

反対 → 無関係の人は巻き込まない
手術をしてもまだ人はたくさんいるから。
他にもやり方あったと思う / 自分勝手か??

↓

3. 第2次判断

主人公の行動に対して、 賛成 反対 ? (どちらかに○をつけて)

理由は?

鏡には入るだけだった。他の人に危害や命の危険はなかったけど、自分にも大切 人がいる半面、他の人にも大切 人がいるから。周りの事を考えたら行動は正しかった。

図2 ワークシート



図3 第1次2次判断を黒板に添付

見を交わす光景が見られた。

VI. 結果

1. 記述分析

第2次授業で用いたワークシート（図2）記述より、道徳的判断の違いをまとめたものを図4に示す。

第1次判断では、賛成派は、「自分が親なら子供の命だけはどうしても守りたい」「法律のために亡くなっていい命なんてない」と理由づけしている記述があり、「生命の尊さ」はもとより、「社会正義」や「家族愛」の道徳的価値が第1次判断に影響をおよぼしたのではないかと考えられる。反対派は、「国が決めていることだから」「関係のない人を巻き込んではいけない」「自己中心的で、周囲のことを考えていない」と理由づけしており、「公德心」をはじめ、「遵法精神」「公正・公平」「社会正義」の価値項目が判断材料として影響していると考えられる。

第2次判断では、ディスカッションと各グループの発表を踏まえ、自分とは違う判断理由について多角的・多面的に考えることにより、これまでの判断よりも広く深く考えている記述がみられた。その結果、第1次判断よ

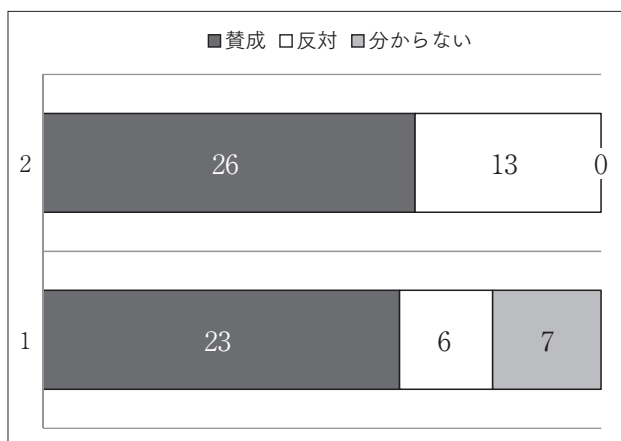


図4 道徳的判断の結果

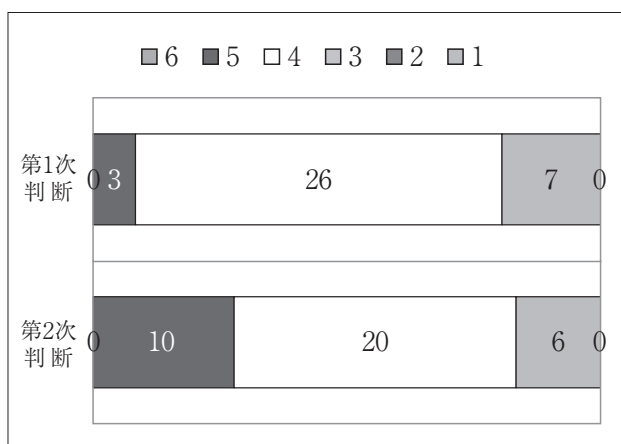


図5 第1次・2次の道徳的判断理由による生徒の道徳性発達段階の人数内訳

りも迷いがみられ自分自身ではどちらが良いか明確に判断することができない生徒も増加した。

第1次判断では、「自分がその立場なら」と記述していた生徒が1名だったのに対し、第2次判断では6名と増加したことから、主人公の立場に自分を置き、自分のこととして捉え深く考慮したことが分かった。

次にワークシート（図2）に記述された道徳的判断とその理由を第1次判断と第2次判断に分けて比較した結果を表3に示す。

さらに、図5にコールバーグの道徳判断の発達段階3水準6段階（表1）に当てはめた人数の内訳を示した。結果、第1次判断では、5段階3名、4段階26名、3段階7名だったのに対し、第2次判断では、5段階10名、第4段階20名、第3段階6名の結果となった。

VII. 成果と課題

1. 授業の様子より

第1次授業では、生徒が授業の目的をよく理解し、資料となる映画に興味を示して視聴していた。そのため、ほとんどの生徒が資料に深く自我関与し生徒自身の道徳的価値や自己の内面と向き合い道徳的判断を行うことができていた。モラルジレンマを取り扱う授業では、教材としての資料の選択が授業の成果に大きく影響する。今回用いた視聴覚教材は映画資料で在り、資料のテーマがモラルジレンマそのものであることから、生徒がモラルジレンマ状況になり、道徳的判断を行い、考えを深めるのに適していた内容であった。また、授業中に生徒から「いままでに道徳の授業で洋画を観たことがない」「このような形態の道徳の授業だったら集中して取り組める」といった声を聞き、資料の選択の成果がみられた。

ディスカッションでは、各グループの司会進行係が中心となり、多様な意見や考えを引き出し、活発に意見交換が行えるよう調整する姿が見られた。また、自分の考えを根拠を示して相手に伝えるよう指示していたこともあり、ただ賛成反対で終わるのではなく、「～だから」「～の理由で」という話し方で発表することができていた。また、他者の多様な意見や価値観について知る貴重な機会になった。

授業が進み、第2次判断を実施する頃には、主人公の行為に対し賛成派が優勢となっていた。そこで少数派の反対意見をもう一度吟味するために「このような事件が多発しても社会は成り立つのか？」と再び道徳的価値の意味や意義を尋ねる発問をした。多様な見方や考えができる場面で、特定の見方や偏った価値に流れていかないようにすることと、もう一度悩み考えることで、道徳的判断力が高まるきっかけとなったと考えられる。

表3 道徳的判断と第1次判断と第2次判断理由の比較

第1次判断	理由	判断	第2次判断	理由	判断
賛成	自分が親なら子供の命だけはどうしても守りたいと思う。	4	賛成	自分が親なら子供の命だけはどうしても守りたいと思う。	4
賛成	命より大切なものは無い。	3	賛成	いろんな意見を聞いたが、やはり命を優先する。	3
賛成	脅迫することは良くないが、人を殺すつもりはなかったから。	5	賛成	無記入	5
反対	命はかけがえのないものだけど、1つの命のために多くの人を犠牲にするのはおかしいと思う。	4	賛成	無記入	4
賛成	ルールを守ることより一人の命を救う方が大切だから。	4	賛成	また同じことが起こるかもしれないが、ルールを変えればよい。	5
反対	銃まで出してはいけない、人は長く生きることに意味があるか、いつか死ぬから。	4	反対	人を殺していなくても脅迫	4
反対	国が決めていることで、個人の意思だけで行動することは許されない。	4	賛成	無記入	4
賛成	死んでしまった人はもう戻ってこないから。	3	賛成	無記入	3
賛成	法律のために亡くなっていい命なんてない。	3	賛成	無記入	3
反対	関係のない人を巻き込み危険な目にあわすのは許されない。	4	反対	やはり関係のない人を巻き込んではいけない。	4
反対	自分の都合で、他人を人質に取ることは許されない。	4	反対	最愛の人を守るにしても方法が間違っている。話し合い。	5
賛成	助けられる方法があるのに、金銭的な理由で死なせてしまうのはやりきれない。	5	賛成	無記入	5
賛成	命は一度きりで、犯罪は償えるから。	5	賛成	無記入	5
賛成	本当はやってはいけないことだけど、行動しなければ息子は死んでいたので。	4	賛成	やっぱり理屈では人の命は助けられない。未来の命救った。	5
反対	そのような人たちは世界中にいると思うから。	4	反対	そのような人たちは世界中にいると思うから。けど悩む	4
賛成	金より命	3	賛成	自分も同じことをする。	3
反対	関係のない人を巻き込んではいけない。	4	反対	守りたいのはわかるけど、違う方法を探すべき。	4
反対	子どもを守るためでも他人を巻き込んではいけない。	4	反対	罪を犯して助けるのでは意味がない。他の方法があった。	5
賛成	許されることではないけど命には代えられない。	4	賛成	行為は正しくないけど、命には代えられない。	4
賛成	機関に助けを求めてもダメなのはあまりにもひどすぎる。	3	分からない	そうする状況しかなかったと思うけど、他にもいると思う。	4
賛成	大切な人を助けたいという気持ちは当たり前で、他の人を殺していないから。	4	賛成	社会のルールを変えるきっかけとなったから。しょうがない状況。	4
賛成	社会のルールだからという理由で息子を死なせたくない。	4	賛成	主人公の行動は制度を変えるきっかけとなったから。	4
反対	命を最優先する気持ちはわかるが、無関係の人を巻き込むのは違うと思った。	4	分からない	自分にも、他者にも大事なひとがいるから。	4
賛成	やってはいけないことだが、だれも傷つけないよう計画を立てていたからしょうがない状況。	4	賛成	自分も同じ判断をすると思う。	4
反対	気持ちはわかるけど他の方法を探すべき、判断が間違っていた。	4	分からない	その立場にならなければわからない。	4
反対	気持ちはわかるけど他の方法を探すべき、判断が間違っていた。	4	賛成	社会を変えるきっかけとなったのは良いと思った。	5
賛成	あの状況ではそうせざるを得なかった。	3	分からない	危害を加えるつもりがなく行動したので。	3
賛成	子どもを助けるために病院をジャックすることは悪いことだが、社会を変えるきっかけとなったから。	4	賛成	ルールを変えることができたことが良かった。	4
賛成	命の方が大切だと思ったから。	3	賛成	色々な意見を聞いたが、命には代えられない。	3
賛成	やってはいけないことだと分かっているけど、子供が大切だと思う気持ちがわかる。	4	賛成	ルールを守るために命を奪うのは違うから。ルールを変える	5
反対	自己中心的で、周囲のことを考えていない。	4	分からない	周りのことを考えなければいけないが、その立場になったら分からない。	4
賛成	子どもの命が大切なのが分かる。他の命を奪う気はなかったから。	4	賛成	他にもそういう人がいることはわかるが、この行動に賛成	4
賛成	犯罪でも、良い方向に変わっていったから。	4	賛成	主人公がそうでなかったとしても第二の主人公が現れたから。	5
賛成	犯罪はいけないが、金銭を理由に、命を大切にしない社会を変えようとした主人公はすばらしい。	4	賛成	自分も同じ立場ならそうする共感できる。	4
反対	他にもいるし、たくさんの人を巻き込んではいけない。	4	分からない	他に危害を加える気はなかったし、自分もどうするか分からない。	4
賛成	ルールではわかっていても他に手段がなかったから。	4	分からない	自分にも、他者にも大事な人がいるから分からなくなった。	4

2. 振り返り分析

モラルジレンマの状況を設定し、公德心と生命の尊さの2つの道徳的価値に対しどちらかを選ぶ第1判断のなかで、賛成派の「自分が親なら子供の命だけはどうしても

も守りたい」「法律のために亡くなっていい命なんてない」、反対派の「国が決めていることだから」「関係のない人を巻き込んではいけない」「自己中心的で、周囲のことを考えていない」等の記述が多数みられた。中学校道

徳科における内容項目に当てはめてみると、生徒が社会正義や家族愛、遵法精神や公正・公平など、2つの道徳的価値以外の価値基準によって判断していることが分かった。この結果から、道徳的葛藤が起きている場面で、2つの道徳的価値について判断する場合でも、多様な価値判断が影響していることが見取れた。

表3の第1次・第2次判断の記述の内容をもとに、道徳性の発達段階の変化を検証した結果、第4段階が26名から20名に減少し、第5段階が3名から10名に増加した。第4段階から第5段階に移行したと考えられる7名の生徒のなかで、賛成派の一人は「ルールを守ることより、一人の命を救う方が大切だから」から「また同じことが起こるかもしれないが、ルールを変えればよい」と回答し、反対派の一人は、「自分の都合で、他人を人質に取ることは許されない」から「最愛の人を守るにしても、方法が間違っているので違う方法を」と回答が変化した。前者は、生命の尊重を主張しつつも、社会正義や遵法精神の道徳的価値も大切という思いが感じられ、後者は、公德性を主張しながらも、主人公の行動に対して共感する部分が芽生えたことが見取れる。また、第1次・第2次判断で立場が変わった生徒は、各グループでのディスカッションや発表を通して、他の生徒の多様な考え方や価値観に触れたことによって道徳的判断が変化した。このことから、他者の立場から自分自身を見つめなおしディスカッションをする経験を通して、役割取得能力が身につく、道徳性が高まるきっかけとなったと考えられる。

3. 課題

本実践は、生徒のワークシートの記述を中心に分析、検討したものであるため、効果の検証がある側面ではしか捉えられておらず、授業中の生徒の態度や発言、思考の変容についての検証がなされていない。道徳の授業では、そうした生徒の様子や発言が大切であり併せて検証していく必要がある。今後は、さらに多面的・多角的な評価を用いて信頼性を高め、道徳の実践に取り組んでいきたい。

<文献>

- ・相澤伸幸 (2010) 新旧の道徳教育の理論と実践 吉田武男・相澤伸幸・柳沼良太(著) 学校教育と道徳教育の想像 学文社 pp.58 - 113
- ・赤坂真二 (2011) 授業づくりこそ、学級づくりの王道である 諸富祥彦・赤坂真二・会沢信彦(編) 学級づくりと授業に生かすカウンセリング (チャートでわかるカウンセリング・テクニックで高める「教師力」) ぎょうせい pp.10 - 13

- ・荒木紀幸 (1995) ビデオで授業レッスン4 モラルジレンマの授業 中学1年 明治図書
- ・荒木紀幸 (1997) 続 道徳教育はこうすればおもしろい
- ・荒木紀幸 (2015) 兵庫教育大学方式によるモラルジレンマ授業の研究 道徳性発達研究第9巻第1号3-4
- ・荒木紀幸 (1991) [道徳性の発達と学校教育] 大西文行編「信・児童心理学講座9 道徳性と規範意識の発達」141 - 147 金子書房
- ・Beyer,B.K. (1976) Conducting moral discussion in the classroom, *Aplil.Social Education*,194-202
- ・Dewey,J (1903) The logical conditions of a scientific treatment of morality. Chicago, Illinois: Univ. of Chicago press.
- ・Galbrith,R.E. & Jonse,T.M(1975) Teaching strategies for moral dilemma. *Social Education*, 1, 16-22
- ・伊藤文一 柴田悦子 (2016) 生徒が主体的に「考え、議論する」道徳科の実践的研究 福岡女学院大学紀要・人文学部編第26号 pp.41 - 42, 49, 54
- ・岩井俊憲 (2011) 勇気づけの心理学 金子書房
- ・岩佐信道 (1985) 道徳性の発達心理学 1. 道徳判断の発達教育心理 vol.33 no1. 日本文化科学社
- ・Kohlberg,L (1969) stage and sequence:The cognitive-developmental approach to socialization. In D.A.Goslin (ED.) *Handbook of socialization theory and research*. chicago : Rand McNally. pp.347 - 480 永野重史 (監訳) 1987 道徳性の形成: 認知発達のアプローチ 新曜社
- ・Kohlberg (1971) 「である」から「べきである」へ 永野重史 (編) 道徳性の発達と教育: コールバーグ理論の展開 信曜社
- ・文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 総則編 pp.18 - 19
- ・文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 総則編 pp.22 - 25
- ・西村正登 2013 モラルジレンマと構造化方式による道徳授業の比較研究 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第36号 2013 pp.64 - 65
- ・小川哲哉 渡邊英一 渡邊哲郎 (2014) 茨城大学教育実践研究33 公共性を考える道徳教育実践 高校道徳の事例から PP.135
- ・Piaget, J (1930) *Le Jugement moral chez l'enfant*. 大伴茂(訳) (1957) 臨床児童心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達 同文書院
- ・佐野安仁・吉田謙二 (1993) コールバーグ理論の基底 世界思想社
- ・新富康央 (2009) 個と集団を育てる学級づくり 児童心理 63(6) 金子書房 pp.12 - 17